

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第231号 2012年2月15日

OCHADAI GAZETTE Spring, 2012



「社会の良心」たる大学として

CONTENTS

TOPICS

- | | |
|---|--|
| 学長からのメッセージ…………… 1-2
新しい年を迎えて | 附属学校園からのお知らせ…………… 7-8 |
| 学生のアクティビティ…………… 3-4 | キャンパス点描…………… 9-10 |
| 教員紹介…………… 5
● 伊藤 貴之 先生(理学部 情報科学科 教授) | ● お茶の水女子大学の新しい寮「お茶大 SCC」が
2011年度グッドデザイン賞(住宅部門)を受賞 |
| 卒業生紹介…………… 6
● 菅 理恵子 さん(文教育学部 言語文化学科卒) | ● 歴史資料館企画展「関東大震災とお茶の水女子
大学本館~校舎焼失からの復興~」を開催しました |
| | ● オープンキャンパスを開催しました |
| | ● 第62回徽音祭を開催しました |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

学長からのメッセージ

新しい年を迎えて

2012年が新たな復興の年になることを願い、お茶の水女子大学はその復興の一端を担って行きたい。

2011年3月11日の東日本大震災後、本学では被災学生支援と被災地支援を速やかに開始し、災害対策研究にも着手した。

まず学内の被災学生に対しては2011年3月末に被災学生支援金制度を設け、主に住家の全壊・半壊等の学生を対象として、学部生には4年間、博士前期課程の学生には2年間、後期課程の学生には3年間経済的な支援をすることとし、新たに入学する学生にもこの制度を適用することにした。

また、被災地支援活動では次のことを基本方針としている。被災地のニーズに合致した効果的支援であること、大学の特性を生かした支援であること、中長期的な展望をもった計画的な支援とすること、の三点である。

支援活動は、教育支援を中心に、理科教育や幼児教育支援を行っているが、これは、学校現場で必要とされている教材の提供などに加え、教員研修や授業補助も含めた物的・人的両面での支援である。

災害対策や復興に関する研究プロジェクトとしては、「小学校モデル」の構築、災害時の緊急避難行動に関する認知科学からの研究、避難者確認システムの開発などがあり、中でも、「小学校モデル」では、単に教育機能やコミュニティ機能だけでなく、新たなエネルギー循環を実現する生活空間の構築を目指している。どれも小規模な研究プロジェクトながら、これまでとは異なった視点から新しい生活環境を提案するプロジェクトであり、汎用性が期待できる。

これ以外にも、学生のボランティア活動や教員個人のネットワークを活用した支援活動が活発に行われているが、学生が支援活動に参加する際には、とくに学生の自発性を尊重し、安全を図るとともに学生の成長に資する活動であることを重視している。

そしていずれの活動においても、大学として新たな社会の構築に資することを本学は基本的に志向している。

そのためにも、今、私たちは科学技術の意味や社会の進歩発展の意義を根本から問い直す必要がある。それは、今回の災害が、自然災害のみならず原子力発電所の事故にも起因するものでもあり、したがって自然災害に対する防災と復興という問題に加えて、放射性物質による被害の実態把握と対応が緊急の課題となったからである。

防災と復興を仮に一次的、直接的課題とすれば、原子力発電所の事故は、二次的課題、つまりエネルギー問題を私たちに提起した。それは、エネルギーの確保と消費の両面に関わる課題である。確保の面では、原子力エネルギーが齎す禍と福の具体的かつ厳密な検証と、代替エネルギーの研究開発が急務であり、消費の面では、生活の仕方の見直しを含めて利便性そのものの再考が求められている。

さらに、第三の課題がある。それは、研究においては、科学や技術の進歩が人間にとってあるいは社会にとって何を意味するかを常に意識しておく必要があるということであり、教育の場としては、次世代を担う人材としてどのような人々を育成するのか、その理念を明確にしておくことである。そしてこれは大学にとって最も本質的な課題といえるだろう。

近代科学は、自然を対象化し解明し支配することを目標とすることによって、社会の発展に寄与してきた。また、その手法は人間にも適用可能とみなされ、それによって学問の客観性が保証されると考えられてきた。同時に技術開発は科学的知識を具体的場面で利用可能にすることで、科学と技術が相即して私達の生活を快適で豊かなものとしてきた。

こうした科学技術の発展の中に身を置き、そして今回の大震災と原発事故に直面して、私たちは科学と技術の意味を改めて問わざるを得ない。

昨秋、科学技術振興機構による「日中大学フォーラム」が開催され、そこで「大震災と大学の役割」という震災特別セッションが行われた。このセッションには、東北にある三大学と中国四川省の大学からもパネリストを招き、私はモデレーターとして参加したが、そこで発言された「大学は社会の良心である」という言葉がとくに印象に残っている。四川大地震は内陸での地震であり、東日本大震災は地震・津波・原子力発電所の爆発という大きな相違はあるが、大災害の後各大学がどう対処したか、この経験を今後どう活かすかなど極めて有益な議論がなされた。特に大学の役割を考えたとき、第三の課題、つまり次世代を担う人材を育成する教育研究機関としての課題を果たすには、大学が「社会の良心」となって、長期的な観点から人類の未来を描きつつ研究と教育に当たらなければならない。

これまで蓄積してきた科学の進歩を止めることは賢明ではない。そうではなく、近代科学への依存や技術に対する過信を再考することが求められているのではないか。

「技術は単に手段であって、それ自体善でも悪でもない。重大なのは、人間が技術から何を作り出すのか、何の目的で人間は技術を用いるのか、人間が技術をいかなる制約下に置くのか、である。技術に支配されるのではなく、技術を支配する人間とはどのような人間か、が問題なのである。」(カール・ヤスパース『歴史の起源と目標』*Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, 1949年)

日常生活や人間が存在することの意義を念頭において、人間性を重視し、科学と技術の在り方を問い続ける姿勢が現在の状況において大学には求められているのではないだろうか。

お茶の水女子大学の教育の理念は、「知識」と「見識」と「寛容」にある。ここ数年の教育改革を通して、本学では、確かな「知識」、適切に判断する「見識」、多様性を理解し認める「寛容」をカリキュラムの形で実現している。

本学で学んだ学生はそのような教育を受けたことを心に留めて、これまで培った力を社会で存分に発揮してほしい。お茶の水女子大学の卒業証書や修了証書は、「社会の良心」として専門的な知識を発揮しうる能力を保証するものである。卒業生には、自信と勇気をもって社会に身を投じ、新しい未来を創っていただきたいと切に願う。

お茶の水女子大学は、今後もこの教育理念の下、優れた人材を育成し、高度な教育研究機関として社会の豊かな発展に寄与して行きたいと考えている。

2012年1月
学長 羽入佐和子

学長からのメッセージ
新しい年を迎えて

学生のアクティビティ

お茶の水女子大学には公認課外活動団体が45団体（文化系27団体、体育系18団体）あり、それぞれ活発に活動しています。今号では、その中から5団体をご紹介します。



大会用の衣装を着てこれからリンクを貸し切って、プログラムの練習をします！

フィギュアスケート部

「No Skating, No Life! スケートが好き!」

私たちフィギュアスケート部は、高田馬場にあるスケートリンクで週に2回、活動しています。16名の部員はみんな仲が良く、アットホームな雰囲気部の部です。また、東京大学や東京外国語大学など他大学とも交流があり、楽しく練習に励んでいます。

フィギュアスケートというと、小さな頃から始めるスポーツというイメージがありますが、大学生から始めても半年から一年でジャンプやスピンもできるようになります。お茶大の部員も、全員が大学に入ってからスケートを始めました！最初はみんな手すりから離れられないところからのスタートですが、先輩から教わって練習するうちにだんだんと上達していきます。学生の大会もあり、スケート選手と同じように曲に合わせてプログラムを滑ります。日頃の練習の成果をみせる大切な機会です。

学生からでも楽しめるフィギュアスケート、みなさんも興味がありましたらぜひリンクに遊びに来てみてください。

古川陽菜（生活科学部人間生活学科生活文化化学講座2年）

お茶の水管弦楽団

「音を重ねた瞬間の感動は無限大!」

こんにちは！お茶の水管弦楽団、略してお茶管です。お茶管は東京で活動する学生オーケストラで、主に東京医科歯科大学とお茶の水女子大学の学生が主体となっています。最近では様々な他大学の学生も参加しています。週2回の練習を通して、演奏する側も聴く側も感動できる音楽を作ろう、と切磋琢磨しています。

お茶管では、春と秋の年2回、定期演奏会を開いています。東京医科歯科大学・お茶の水女子大学の両学園祭においては、団員による小編成のアンサンブルを聴きながら喫茶を楽しめる、音楽喫茶「オアシス」を開いています。その他には、幼稚園での訪問演奏などを行っています。幼稚園では小さな子どもたちに、オーケストラの楽しさを伝えられるように楽しく演奏しています。お茶管の団員は音楽に対して情熱をもっており、楽しみながら真摯に音楽と向き合っています。随時演奏会のお知らせをしますので、是非私たちの演奏を聴きにいらしてください！

小野寺咲紀（文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コース 2年）



ある日の練習メンバー

第88回定期演奏会(平成23年春演奏会)





小舞の稽古

狂言研究会

「古くて新しい 室町の笑い」

狂言研究会は、学部1年生から大学院博士後期課程3年生までの14名で活動しています。能・狂言の研究に加え、狂言を実際に演じることが活動内容です。毎年徽音祭でも狂言を上演しています。

はじめは皆初心者ですが、先輩から能・狂言のことを教わったり、公演を見に行ったりするうち自然と親しみ、詳しくなっていきます。部員同士とても仲が良く、お稽古も和気あいあいとして賑やかです。

また、東京大学・早稲田大学・成城大学・共立女子大学・東京女子大学とお茶大からなる「六狂連」に所属しており、他大学との交流も盛んです。合同で主催する自演会「蟬の会」では本物の能楽堂の舞台に立つという貴重な経験が出来るため、熱心にお稽古をして本番に臨みます。

普段は狂言を演じる際の基礎となる小舞と謡(うたい)を練習しています。発表会の前には、師事しているプロの狂言師の先生に狂言のお稽古をつけていただきます。初心者から気軽に始めて、狂言の深い魅力に触れられるサークルです。

城田佳央理(文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コース3年)

硬式庭球部

「あ、そうだ。テニスしよう。」

私たち硬式庭球部は、現在学部1年生3名、2年生2名の計5名で活動しています。練習は基本的に週2回、2~3時間程度で、部員の予定に合わせて曜日を決めています。その他の活動として、23年度は夏休み中に合宿と通い練習を行いました。部員は少ないですが練習には毎回OB・OGなどの外部の方が、また東京大学や地元からコーチが来て下さり、部の活動を全面的にサポートして頂いています。みなさん親しみやすく、熱心かつ丁寧に指導して下さいるので、個々の技術を向上させながら真剣にそして楽しく、和気あいあいとテニスをしています。部員には初心



お茶の水女子大学

タイトル: 道 作者: 美術部1年

者が多いですが、思う存分集中してテニスに打ち込める環境の中で、球数を多くこなして日々練習に励んでいます。今後は、練習や試合を通して学んだことを部の土台作り生かしなが、4月に迎える新入部員とともに活動をより一層盛り上げていきたいと思っています。

奈良香織(理学部生物学科1年)

美術部

「OCHA-BI☆」

活動は、絵画班と陶芸班に分かれています。こじんまりとしたブースで、作品の相談をし合い、和気あいあいと作業を進めていきます。今年度の部員は、学部1年生6名、2年生9名、の合計15名で、時には3年生の先輩も交えて共に作業をします。基本的に作る作品は自由です。陶芸班では、指導を受けながら作品を作りますが、絵画班では描きたいものを描きたいように描いています。拾ってきた枝でオブジェを作ることもあります。合宿では、益子焼きで有名な栃木の益子でペンションに一泊して、陶芸体験をし、益子陶芸美術館を訪れました。徽音祭では「ART CAFÉ」という、作品展示・販売エリアと合わせて、テーブルと席も設け、そこでクッキーにチョコペンで絵を描いてもらおうという主旨のカフェを開きました。美術部は、これからも新しい事にマイペースに挑戦していきたいと思っています。現在は、写真部との合同展示の開催を計画中です。

田辺裕子(文教育学部言語文化学科1年)

学生のアクティビティ

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回はシミュレーション科学教育研究センター長に着任された、理学部 情報科学科 教授の伊藤貴之先生にお話を伺います。



Ito Takayuki
伊藤 貴之

どんどん外に出て行って、 広い世界を見て欲しい

Q ご経歴を簡単に教えてください。

1992年に早稲田大学大学院修士課程修了後、日本IBM東京基礎研究所に就職。ここで研究をしながら1997年に博士号を取得しました。その後、2005年にお茶大に着任しました。

Q 現在は情報科学をご専門とされていますが、広い意味で科学を志す気持ちが芽生えた最初のきっかけはどのようなものでしたか？

小さいころは地学や気象などに興味を持っていたのですが、決定的だったのは小学校5年生の時、親戚が間違えて買ってしまった電子工作とプログラミングに関する雑誌を読んだことです。それで小学生なのに雑誌を読んでプログラムを書いたり始めました。また、中学校では吹奏楽部に入ったのですが、この時に作曲に興味を持つようになりました。それでミキサーを電子工作(部品をハンダ付けしながら)で自作し、自分で作曲した曲を録音したりしました。こうして電気好き、音楽好きが高じて大学では電気・情報系の学科に進むことになったのです。将来はサウンド・エンジニアになりたいと思っていました。

Q その時、すでにパソコンをお持ちだったのですか？

いえ、持っていませんでした。そこらへんのノートに鉛筆でBASICのプログラムを書いていたのです。それで書き終えたらノートを持参して秋葉原の電気屋さんの店頭においてあったパソコンでノートに書いたプログラムを打ち込んだりしていました。

Q サウンド・エンジニアを志しながらも研究の道へ進むことになったきっかけは？

大学では電気と音楽の両方をやりたいということで、音響工学の先生がいた学科に入ったのですが、その方が定年で退職されてしまい、その際に後任をとらなかつたため、音響工学の先生が学科にいなくなってしまったのです。それで次に興味があった美術に関連した、コンピュータグラフィックスの研究室に進むことになりました。

Q ご専門および研究内容について、いくつかご紹介ください。

専門はコンピュータグラフィックスです。より細かく言うと、「情報の可視化」をテーマにしています。音楽のような目に見えないものを絵として表してみたり、タンパク質のどの部分が薬と親和性が高いのか、またはクレジットカードの決済情報から、不正使用の手口を可視化したりもします。各研究課題毎に、学生と共に学外の民間企業、団体(現在5箇所と契約)との共同研究を行なっています。また、学生が自発的に取り組みたい問題を持っている場合はそれを具体的な研究テーマとして立ち上げられるようサポートし、必要に応じて学外の専門家と共同で取り組んだりします。

Q 先生ご自身は企業研究所と大学の両方での研究活動を経験されているわけですが、両者の特長や違いなど教えてください。

企業の研究所はプロ集団なので、研究を始めるにあたり、誰にも何も教える必要はありません。一方で大学では学生を育てながら研究を進めることになるので、研究開始初日から跟在りすることが当たり前です。また、企業では事情により、研究が途中で打ち切られたりします。現場で取り組んでいる研究者はあと3ヶ月あれば成果が出せる、と書いていても会社の方針で途中で

撤退することもあり、悔しい思いをしたこともありました。一方大学では完全に私自身の責任で研究を進められるので、途中で誰にも遮られること無く、最後までやり切ることができます。

Q この度新設され、センター長になられたシミュレーション科学教育研究センターについてご紹介ください。

シミュレーション科学教育研究センターは今年の4月に設立されました。一口でシミュレーションといっても、情報や物理、化学等、分野によって全く違う取り組みがされています。分野毎の違いや幅広さに対する認識を深めて、分野を超えて融合した技術を世に出したいと考えています。本学の謳う、文理融合や生活者視点というものにフォーカスし、シミュレーション科学の新しい展開を目指します。特に環境や防災等の分野でイノベーションを作る働きをしたいと思っています。

Q 最後にお茶の水女子大学の学生に関する思い(印象)とメッセージをお願いします。

本学は小規模な大学なので、身の回りの人々の多様性が限られます。どんどん外に出て行って、広い世界を見て欲しいです。それで面食らう事があったり、力の差を感じることもあるかも知れませんが、本学の学生達は力のある人が多いので、すぐに追いつき、追い越せるでしょう。そういう自信を持って、楽観的に広い世界を見て日々を過ごして欲しいと思います。

文責: 曹 基哲
(大学院人間文化創成科学研究科自然・応用科学系教授)



卒業生紹介

成長できる機会を自ら求め、キャリアを築く

Kan Rieko 菅 理恵子

生涯ひとつの会社に勤め続けるより、自らの可能性を求めて、さまざまな組織でキャリアを積みみたい — 労働環境の変化に伴い、そんな働き方が増えている。新卒で小さな外資系IT企業に飛び込み、独力で英語力

を磨きながらキャリアの節目をデザインしてきた菅理恵子さんを、日産自動車、横浜のグローバル本社にお訪ねした。

人にかかわる仕事を夢に

「人事の仕事は天職。ずっと続けていきたい」と語る菅さんは、日産自動車で国内のIS(情報システム)部門の人事採用・評価・異動を担当している。米系コンサルタント会社2社を経た後、2008年に転職した。女性活用に積極的でさまざまな支援制度を整備している日産に憧れ、面接を受けた。「2年間は人事のポストは空かないかもしれません」という状況を承知のうえで、経験のある情報システムプロジェクトマネジメント職で採用される。半年後、幸運なことに人事に空席ができた。

それから3年。現在、菅さんは課長代理として、本社の人事部と連携しながら、IS業務に携わる300人のキャリアパスをグローバルな視点で見ている。「入社後の半年間、実務の現場を経験したからこそ、働く人の思いや課題を組織の中に活かせる」と、振り返る。元々、前職で企業に対しITコンサルティングをする中で、「人材を育成する体制がなければ、どんなに優れたシステムを構築しても、絵に描いた餅」と、人材育成の必要性を痛感したことが、菅さんの「人にかかわる仕事」への出発点だった。

会社は規模や知名度より、働く人の顔

鹿児島の名門県立校、鶴丸高校時代の菅さ



菅(旧姓前田) 理恵子さん プロフィール

日産自動車(株) グローバル情報システム本部
IS企画統括部 課長代理

1999年お茶の水女子大学文教育学部卒業。同年i2テクノロジーズ・ジャパン株式会社入社。コンサルティング部にて大手製造業数社のシステムコンサルティングに従事。2003年ペリキングポイント株式会社入社。サプライチェーンマネジメント部にて大手製造業数社のシステムコンサルティング、人事部にて社員教育の企画運営を行う。2008年10月日産自動車入社。

んは、受験を控えて心が揺れていた。医者になって人を助ける仕事に就くか、文学の道に進んで作家をめざすか。最終的にお茶大の国文科*を選んだ。幼い頃、父からよく聞いた「お茶大に憧れていた祖母」の話がよみがえった。

卒業時の就職事情は厳しく、出版社を受けるも狭き門。やっと企業の出版部門から内定をもらった。「就活」は終わった筈の秋、社員が40名という米系のITコンサルタント会社のセミナー案内をたまたま手にする。日本上陸を果たしたばかりの会社でイキイキと働く社員の姿に惹かれ、180度の転換で道を変えた。初の新卒採用で同期は5名。全員が女性だった。5年後、200人に増えた会社を後に、規模も業態も数倍大きな米系戦略コンサルティングファームで新しいチャレンジをめざす菅さんがいた。最初の1年間はITシステムコンサルタントとして働いたが、やがて、結婚を機に、時間の余裕がある職種へ、また「人にかかわりたい」という思いに押されて異動を申し出る。人事部では社内研修プログラムの企画・運営に通算4年携わり、仕事の幅を広げた。

職場は人生の出会いの場

大学時代、テニスサークルの活動を通して仲間との絆の大切さを学んだ。最初の職場では、帰国子女たちに混じって慣れない英語漬けの環境のなか、職場内実地訓練(OJT)で、やったこともない仕事をいきなり割り振られてうろたえた。同期5人で互いに助け合いながらサバイバル

し、成長した。その頃の同僚たちとは、今でもよく会う。「仕事をするとは、社会への貢献でもあると同時に、人生の大切な出会いを創ること」と、菅さんは言う。好きな言葉は「一期一会」だ。医者になって人を助けたいという夢は果たせなかったが、「人の育成」という天職に出会った。成長の機会を求めてキャリアを自分で切り拓きながら、一人ひとりとの出会いがいろいろなところで輪のように繋がっていると実感している。「優秀な女性はどこ会社でも欲しい。お茶大生なら、期待に応えられる筈。社会の状況にとらわれず自分のやりたいことを見つけ、それが実現できそうな企業に飛び込んで欲しい。何をやりたいのか、その思いをうまく伝えられれば、応募者のなかできらりと光る」とは、採用の現場で働く菅さんから、お茶大生へのアドバイスだ。

文責：坪田秀子(学長特命補佐)

わたしのオフタイム

旅が好き。大学時代から海外に出かけ、今でも年に一回は海外旅行を楽しむ。いつか外国に住んでみたいとも思う。大学時代の一番の思い出も国文科*の卒業旅行だ。自分たちでコースを練り、秋の京都・奈良路を恩師たちと歩いた。週末は、気になったお店を訪ねて食べ歩きで過ごすことも。

*現在の言語文化学科日本語・日本文学コース

附属学校園からのお知らせ

いずみナーサリー

ナーサリーの歩み

大塚宿舎に隣接するいずみナーサリーは、附属幼稚園と園庭の高台(お山の上)でつながっています。幼稚園児が園庭で見つけた虫かごを持って訪ねてくれることもあり、虫への興味と共に園児はナーサリーの小さな子どもたちの憧れの存在でもあります。

このような恵まれた場所にあるいずみナーサリーの設置の経緯について説明致します。「生涯にわたる女性の学習を保障する場」「乳幼児の発達と保育研究の場」として保育所設置に賛同した教職員の方々のご尽力によりベビールームの開設、2002年に附属幼稚園内の一室でいずみ保育所が開所しました。2005年には、大塚宿舎の一部を改修して正式にお茶の水女子大学附属いずみナーサリーとして位置付けられ現在に至っています。



本館中庭の石で遊ぶ0歳児



学生が企画したスライム作りの様子



初冬の学生会館の前、落ち葉で遊ぶ1歳児

大学の中で子どもたちが育つ

天気の良い日は毎日、大学構内に散歩に出掛けます。本館中庭のスロープや芝生を這う、歩く、走る、段差を見つけて上る、下りる、跳ぶという身体的なあそびだけでなく、季節の風や音、光を感じながら石ころや木の実、草花、木々にふれ自然をからだで感じます。小さな子どもたちが自然と出会い、五感を通して美しさ、面白さ、不思議さを感じることで豊かな心を育てています。

散歩の途中で声を掛けてくださる方がいたり、生協に牛乳を買いに行くときと店内で学生と出会うたり、丁寧に対応して下さる生協のスタッフの姿に接したり、といったことを体験するにつれ、子ども達が大学の中で多くの人に温かく見守られ、共存していることを実感します。

人への信頼感を育む乳幼児期、寄り添うのは保護者・保育士だけでなく様々な学生が関わります。



本館中庭を走る2歳児

食育サークル(Ochas)によるおやつ作り、保育や楽器演奏の学生ボランティア、「科学で遊ぼう」を企画する学生などがナーサリーの日々を多彩で豊かなものにしていきます。

保育研究の場

大学の子どもプロジェクト(生活科学部人間生活学科 浜口順子准教授他の先生方)と研究会を行っています。21年度から研究会のテーマ「保育室の環境」をすすめてきました。水平面から垂直面の空間へ、静から動の遊びを考え、高低差のある遊具の製作に取り組み、工房の方々と話し合いを一年以上重ねて22年に室内大型遊具が設置されました。



Ochasの学生によるスイカパーティー

木の素材の持つ安心感と温かさが伝わるのか、横になり顔をつける、高台に登って手を振り、体を揺らす子など、高いところに登れた喜びを身体で表現しています。



工房と協同で製作した大型遊具

いずみナーサリー主催で公開保育講座を行っています。22年度はおもちゃ美術館館長多田千尋氏を迎え「保育に活かすおもちゃの力」というテーマで公私立保育所の保育士、学生が集まり、共に保育を学ぶ場となりました。



ナーサリー主催の公開保育講座の様子

附属学校園での出来事 (2011年9月～12月)

【いづみナーサリー】

9月

- ・ボランティア学生「ぶかぶかさんを作ろう」
- ・おにぎりパーティー
- ・避難訓練(引き取り訓練)

10月

- ・生活社会科学部インターンシップ報告会
- ・大学内保育所交流会
- ・2歳児ピクニック(学生会館前広場)
- ・保護者会
- ・食育懇談会「乳幼児期のお弁当の工夫」
(講師:生活環境教育研究センター助教・
管理栄養士 會退友美 先生)
- ・保育臨床実習開始
- ・親子で遊ぼう会
- ・父親懇談会
- ・こどもプロジェクトとの研究会
- ・避難訓練

11月

- ・避難訓練(抜きうち訓練)
- ・保育参観(学生会館前広場)
- ・保護者懇談会
- ・こどもプロジェクトとの研究会

12月

- ・クリスマス会(Ochasの手作りカレー)

【附属中学校】

9月

- ・生徒祭
- ・研究授業
- ・音楽行事(合唱コンクール)

10月

- ・経路別会合
- ・期末テスト
- ・生徒理解研修会
- ・秋休み
- ・前期終了
- ・後期開始
- ・台湾新北市教育委員会来校
- ・3年生学力テスト(第4回)
- ・秋の身体計測(5・6校時)
- ・1年生郊外園(サツマイモ収穫)
- ・2年生保護者会
- ・生徒会選挙(投票)
- ・3年生保護者会(進路)
- ・学校説明会 第1回

11月

- ・関附連埼玉(国・音・体・英)
- ・学校説明会 第2回
- ・避難訓練
- ・生徒会役員任命式
- ・公開研究会
- ・3年生中間テスト
- ・ファミリーの会(保護者)
- ・芸能鑑賞(古典芸能)

【附属幼稚園】

9月

- ・誕生会
- ・第1回公開保育
- ・防災訓練(小学校校庭で引き取り訓練)
- ・遠足(4歳児)

10月

- ・運動会
- ・PTAバザー
- ・5歳児芋掘り
- ・4歳児親子で遊ぶ日
- ・3歳児遠足
- ・誕生会
- ・地球ワールド(年長児による活動)

11月

- ・創立記念の集い(人形劇団ブーク)
- ・幼小連絡協議会

12月

- ・餅つき
- ・誕生会
- ・巡回指導
(講師:筑波大学附属大塚特別支援学校
主幹教諭 安部博志 先生)
- ・附属小学校2年生のお離子見学
- ・終業式・影絵上演「ジャックと豆の木」

12月

- ・1年生校外学習(隅田川歴史めぐり)
- ・1・2年生中間テスト
- ・マラソン大会
- ・各学年保護者会
- ・鏡水会プレゼンテーション
- ・大掃除
- ・総合カリキュラム
- ・冬休み開始

【附属高校】

9月

- ・文化祭
- ・教育実習事後指導
- ・1年生菊組農場実習
- ・秋季身体測定

10月

- ・自治会選挙
- ・3年生学力テスト
- ・2学期中間試験
- ・第62回ダンスコンクール
- ・1年生農場実習(サツマイモ収穫)
- ・3年生学力テスト

【附属小学校】

9月

- ・2学期始業式
- ・委員会活動(5・6年生)
- ・栄養教諭教育実習
- ・開校133周年記念日
- ・引き取り訓練

10月

- ・衣替え
- ・委員会活動(5・6年生)
- ・授業研究会(5年生創造活動)
- ・附属校園PTA連絡委員会主催
「佐藤弘道氏講演会」
- ・かがみ会バザー
- ・避難訓練
- ・授業研究会(2年生なかま)
- ・土曜登校日・たてわり班活動お弁当会
- ・郊外園活動さつまいもほり(4・5年生)

11月

- ・委員会活動(5・6年生)
- ・土曜登校日<保護者参観日>
- ・音楽会
- ・避難訓練
- ・郊外園活動大根ほり(1～3年生)

12月

- ・特別支援教育巡回指導
- ・委員会活動(5・6年生)
- ・JICA中西部アフリカ研修参観
- ・学期末連絡会
- ・2学期終業式
- ・研究会議

11月

- ・第2回保護者授業参観日
- ・第17回公開教育研究会
- ・学校教育研究部主催
「カリキュラム評価講習会」

12月

- ・2学期期末試験
- ・2年生外務省高校講座
- ・教育後援会設立20周年記念音楽会
- ・2年生人権研修会(デートDV)
- ・避難訓練
- ・2年生卒業生を囲む会
- ・中学生向け理数体験授業
- ・1・2年生映画鑑賞(月桃の花)
- ・東工大ウインターレクチャー
- ・お茶大キャリアガイダンス
- ・2学期終業式

キャンパス点描

お茶の水女子大学の新しい寮「お茶大SCC」が 2011年度グッドデザイン賞(住宅部門)を受賞

2011年3月に小石川寮のとなりに完成した新寮「お茶大SCC」(お茶の水女子大学 Student Community Commons)が、グッドデザイン賞(住宅部門)を受賞しました。

グッドデザイン賞は、公益財団法人日本デザイン振興会が主催する日本で唯一の総合的なデザイン評価・推奨制度で、世界でも有数の歴史と実施規模を誇るものです。

「お茶大SCC」は、大学院人間文化創成科学研究科元岡展久准教授、鈴木杏理さん(大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程ライフサイエンス専攻)、河野泰治アトリエの共同による基本設計にもとづいて建設されました。

「お茶大SCC」は学生が共に生活し、共に成長する場所として設計された新しいルームシェア型の学生寮です。個性豊かな学生たちの人間関係の中で、自立性と協調性をもった人格を育む場所として、個室と共有スペースを兼ね備えた「ハウス」が整備されました。

その「ハウス」を単位とし、1つのハウスに5名の学生が生活するという新しいタイプの学生寮です。充実した寮生の支援のプログラムも魅力となっています。

長い歴史を誇るグッドデザイン賞ですが、大学の学生寮が受賞



SCC 外観南東面

したのは、「お茶大SCC」を含めわずか2件しかありません。

審査員からは、「学生寮として、集団で生活することの社会的な意味を、平面計画に積極的に提案している点を評価したい」との講評をいただきました。



中央の共有スペースを囲むように個室が配置されているハウス



**GOOD DESIGN
AWARD 2011**

歴史資料館企画展「関東大震災とお茶の水女子大学本館 ～校舎焼失からの復興～」を開催しました

2011年10月1日より14日まで開催したこの企画展は、3月に発生した東日本大震災からの復興への願いを込めて、急遽、企画したものです。

本学の前身である東京女子高等師範学校は、かつて大塚ではなくお茶の水(現:文京区湯島)にありました。ところが、1923年9

月の関東大震災で校舎を焼失するという災厄に見舞われてしまいます。当時の教職員はじめ学校関係者が受けた衝撃は甚大でした。そして、その後、大塚に校地を移し、今に至っています。

展覧会では、焼失した校舎、焼跡に建設された仮校舎、復興を祝う祝賀会などの写真をはじめ、震災当日に校舎から搬出されて焼失を免れた教務・庶務関係の重要書類、当時の様子を克明に記録した日誌などを展示しました。また、震災からの復興事業の中心であった大学本館(1932年竣工)の見どころMAPを作成し、紹介しました。そして、10月13日にはギャラリートーク及び大学本館の見どころツアーを実施しました。展覧会の来場者からは当時の学校関係者の復興にかけた熱意と努力に共感の声も寄せられました。また、多くの卒業生やその関係者にもご来場いただき、新たに大学資料を寄贈いただくこともできました。

展覧会で展示した写真など資料の一部は、「デジタルアーカイブズ」でご覧になることができます。<http://archives.cf.ocha.ac.jp/>



オープンキャンパスを開催しました



模擬授業（中国語圏言語文化コース）

2011年10月1日と2日に学部オープンキャンパス（大学見学会）を開催し、2日間で合わせて約3,000名を超える受験生や保護者の方々にご参加いただきました。

全体説明会では、羽入佐和子学長から躍進するお茶大の紹介と受験生へのメッセージ、続いて耳塚寛明教育機構長から多様な入試制度、今年度からスタートした新しい専門教育課程「複数プログ

ラム選択履修制度」、本学独自の奨学金、新学生寮（お茶大SCC）などについての説明が行われました。その後、学部長による学部・学科の説明があり、皆さん熱心に耳を傾けていました。

全体説明会後には、各学科・講座・コース別に、体験授業や在学生による学科説明、研究室ツアーなどが行われ、こちらも大変な盛況で、多くの参加者からの活発な質問が飛び交っていました。



実験説明（化学科）

第62回徽音祭を開催しました（徽音祭実行委員会より）

今年度も皆様のご協力のお陰で徽音祭（2011年11月12日、13日）を無事、終えることができました。ありがとうございました。

今年の徽音祭はCOLORFUL ～What's your color?～のテーマのもと、個性あふれる90以上の参加団体や企画が出そろいました。結果として、1日目6,650人・2日目8,130人、合計14,780人の方にお越しいただき、パンフレットも2日目の中盤で在庫切れになってしまう盛況ぶりでした。

華やかさの一方で、今年3月に起きた震災を受けて、今までにない緊張感のある徽音祭になったとも感じております。前日に、参加者全員による避難訓練の実施や来場者への地震発生時の対応についての説明配布が行われるなど、今までにない対応で、大学関係者の皆様・参加団体の皆様には大変なご理解ご協力を賜りまし



実行委員集合!

た。改めて御礼申し上げます。

実行委員内では、既に今年の徽音祭に向け準備が始まっております。今年度の反省を活かし、よりよい徽音祭を作り上げていく所存です。どうぞ来年度もご協力のほどよろしくお願い致します。

徽音祭実行委員会広報・映像担当
中山 翠（文教育学部人文科学科2年）



階段装飾



縁日

キャンパス点描



第62回微音祭

お茶の水女子大学学报 第231号

▽発行日：2012年2月15日

▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学

東京都文京区大塚 2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail : info@cc.ocha.ac.jp

URL : http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学报「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。